

# 『絵画鑑賞』

2014.6.25

とっとり砂丘クラブ

絵画：視覚芸術　一瞬で全てを情的に伝達することが出来るもの

## 「絵がわかる」とはどういうことか

《知的な理解》　客観的かつ論理による

○美術史の位置づけ　○構図や描き方などの技術　○テーマ　○時代背景や作家の人生観等

《情的に感じること》　主観的で理屈を超えている。

○色や線や造形やマチエール（絵の表面の肌合い）の美しさ　○可愛い、おかしい、悲しい・・・  
といった情感　○絵画から受けるエネルギー　○叙情性　等

※知識や知的作業は情的に感じる力を高める役割がある。

※芸術性を感じる（目を高める）ためには、何度もよく見る必要がある。すると内的な目が開けてくる。

## 「主観的鑑賞」のすすめ　自分のこととして絵を見る

- ・ 鑑賞の最初は勝手に見ることである。
- ・ 作品から受ける印象や感じ方には、決まり切ったものがない。正解はない。
- ・ 画家が絵を描こうとする動機（原動力）は、森羅万象から受ける理屈を超えた感動である。
- ・ 作品に表出する色や造形や構図などの形状を支えている根本的エネルギーは、人間の内的な存在要素である「霊性」といえる。それは必ずしも思考や感情ではない。
- ・ どことなく惹かれて、気に入る絵には必ず鑑賞者自身の内面が潜んでいる。
- ・ 惹かれる絵は自分自身だと思い（自分のこととして）徹底して主観的に見る。  
すると、絵の中に鑑賞者自身の魂が見えてくる。

〈名画とは万民の心の奥底（魂）に眠る美を呼び覚ますもの〉

参考資料：「わくわくアート情報／絵画の見方」トッププロフフレンドサークル

## 『名画の中に入ってみよう！』

さあ、これから名画の中に入っていきましょう。そして、貴方の言葉で訴えて下さい。

「モナリザ」　レオナルド・ダ・ビンチ

「青いターバンの少女」（真珠の耳飾りの少女）ヨハネス・フェルメール

「叫び」　エドヴァルド・ムンク

# 絵画鑑賞

とっとり砂丘クラブ  
2014. 6. 25

# 絵画

一瞬で全てを情的に伝達することができる芸術

# 「絵がわかる」とはどういうことか

## 《知的な理解》 客観的かつ論理による

- 美術史の位置づけ
- 構図や描き方などの技術
- テーマ
- 時代背景や作家の人生観等

## 《情的に感じること》 主観的で理屈を超えている。

- 色や線や造形やマチエール(絵の表面の肌合い)の美しさ
- 可愛い、おかしい、悲しい…といった情感
- 絵画から受けるエネルギー ●叙情性 等

\* 知識や知的作業は情的に感じる力を高める役割があるが、鑑賞の本質ではない。

# 「絵がわかる」とはどういうことか

- \* 作品から受ける印象や感じ方には  
決まり切ったものがない。正解はない。
- \* 見る目には差がある。
- \* 芸術性を感じる(目を高める)ためには、  
何度もよく見る必要がある。  
多く見ることにより徐々に内的な目が開けてくる。

# 主観的鑑賞のすすめ

- \* 鑑賞の最初は徹底して勝手に見ること

# 絵 画

作品に表出する色や造形や構図などの  
形状を支えている根本的エネルギーは

必ずしも思考や感情ではない。

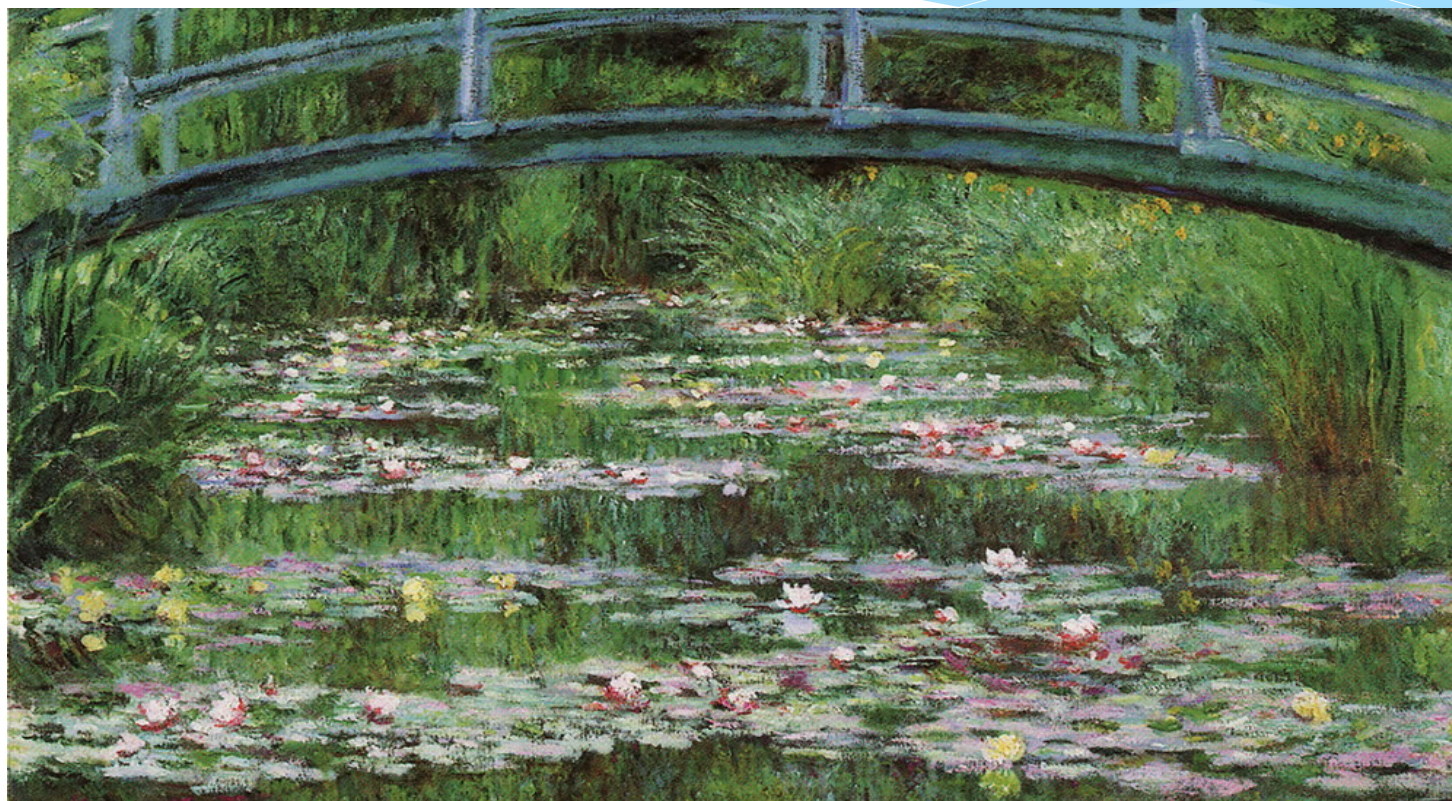
画家の内的な存在要素である「芸術性＝霊性」

# 思考や感情等の内面を表す表現主義的な作品





# 客観的な写実に力点を置いた作品



# 主観的鑑賞のすすめ

- \* どころなく惹かれて、気に入る絵には必ず鑑賞者自身の内面が潜んでいる。
- \* 惹かれる絵は自分自身だと思い(自分のこととして)徹底して主観的に見る。  
—すると—
- \* 絵の中に鑑賞者自身の魂が見えてくる。

# 名画

万民の心の奥底(魂)に眠る  
美を呼び覚ますもの

# 誰でも絵が好きになる鑑賞法

— NHKためしてガッテン— より

美術館の絵画の中で

「自分が一つ買うとしたらどれを選ぶか？」

「自分の家に飾るとしたらどの絵を選ぶか？」

…と考えて鑑賞する

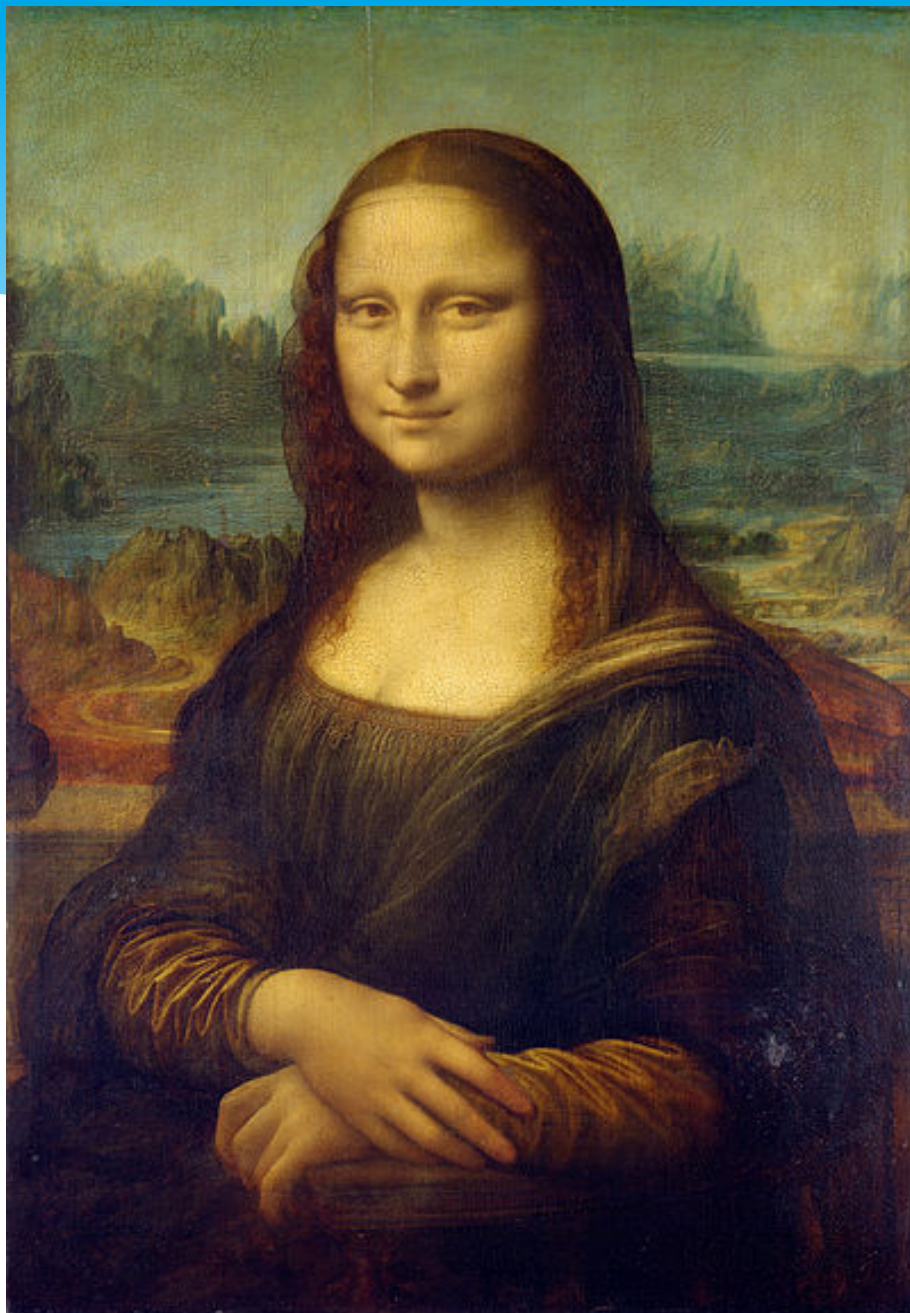
# 名画と対話をしましょう！

次の3つの名画の中から、

自分が一番惹かれる絵を選んでください。



モナ・リザ



レオナルド・ダ・ビンチ

青いターバンの  
の少女

ヨハネス・フェルメール



# 叫び



エドヴァルド・ムンク



# さあ、名画の中に入ってみましょう！

1. あなたは、どの絵を選びましたか？
2. その絵のどこに惹かれましたか？
3. あなたが選んだ 絵の中に入ってみましょう！
4. 描かれている人物になった「つもり」で、鑑賞者に語りかけてください。

# 手 順

1. 選んだ絵の人物に扮装して、衝立から出る。
  - ① クラブ名と氏名をいう。
  - ② その絵のどこに惹かれたか(選んだ理由)を話す。  
(30秒以内)
2. 正面の枠(額縁)の後ろに進み出て、絵と同じポーズをとって座る。
  - ③ 描かれた人物になりきって話す。(1分以内)

# 絵画鑑賞

おわり

とっとり砂丘クラブ

## 『モナ・リザ』

(伊: *La Gioconda*、仏: *La Joconde*) は、イタリアの美術家レオナルド・ダ・ヴィンチ (1452～1519) が描いた油彩画。上半身のみが描かれた女性の肖像画で、「世界でもっとも知られた、もっとも見られた、もっとも書かれた、もっとも歌われた、もっともパロディ作品が作られた美術作品」といわれている。

『モナ・リザ』のモデルは、フィレンツェの富裕な商人で、行政官も務めたフランチェスコ・デル・ジョコンドの妻リザ・デル・ジョコンドだとされている。ポプラ板に油彩で描かれた板絵で、1503年から1506年に制作されたと考えられている。現在はフランスの国有財産であり、パリのルーヴル美術館が常設展示をしている。

この作品が『モナ・リザ』と呼ばれているのは、16世紀のイタリア人芸術家、伝記作家ジョルジョ・ヴァザーリの著書『画家・彫刻家・建築家列伝』の「レオナルドは、フランチェスコ・デル・ジョコンドから妻モナ・リザの肖像画制作の依頼を受けた」という記述が元となっている。2005年にドイツのハイデルベルク大学図書館の研究者が、大学の蔵書である1477年に出版されたキケロ全集の余白部分にラテン語の書き込みを発見した。この書き込みは、フィレンツェの役人だったアゴスティノー・ヴェスプッチ(en:Agostino Vespucci) が1503年に記したもので、レオナルドがリザ・デル・ジョコンドの肖像画を制作している最中であることが、1503年10月という日付とともに記されていた。2004年に実施された赤外線分析の結果からも、『モナ・リザ』の制作開始年が、ジョコンドが次男を出産した1503年ごろだといわれている。

『モナ・リザ』の女性像は、シンプルで安定感のある三角形の構図で描かれており、重ねられた両手が三角形の底辺を構成している。胸、首、顔、手は光源を同じくする光に照らし出され、光の効果が丸みを帯びたさまざまな表情を女性に画面に与えている。レオナルドは、座する聖母マリアが描かれた、当時の典型的ともいえる構成で『モナ・リザ』の女性を描いている。レオナルドがこのような構成で『モナ・リザ』を描いたのは、この女性像と作品の鑑賞者に距離感を持たせる効果を意図していた。左腕が乗せられた椅子の肘掛が『モナ・リザ』と鑑賞者とを隔てる役割を担っている。女性は背筋を伸ばして座り、重ねられた両手は控えめな立ち振る舞いを意味している。視線はまっすぐに鑑賞者に向けられ、この静謐な空間を共有することを歓迎しているかのように見える。光に照らし出された明るい顔は、髪の毛、ベール、陰影などの暗い部分によってさらに強調されている。女性の顔は、レオナルドが用いた新たな技法によって不思議な表情を与えられている。輪郭を描くのではなく「主に口角と眼周辺を表現する (Gombrich)」スフマートの技法で女性の顔が描かれている。レオナルドはこのポーズでリザを描くことによって、高潔で貞淑な夫人を表現している。

『モナ・リザ』は、一人の座る女性を描いた最初期の肖像画の一つである。レオナルドは空気遠近法(en:aerial perspective) を絵画に取り入れた最初の画家の一人でもある。背景にはうっすらとした凍てついた山並みなど広大な風景が描かれている。曲がりくねった小路と遠景の橋には、一人の人影も見えない。官能的に波打つ髪と衣服は、うねるように表現された背後の谷や川と調和している。ぼやけた輪郭、優美な女性像、明暗の劇的な対比、そして静謐さに満ちた雰囲気は、レオナルドの作風の典型ともいえる。

フランス美術館研究修復センターのブルーノ・モッタンは、『モナ・リザ』の女性が身につけている半透明の紗のヴェールが、グアルネッロと呼ばれる、妊娠中あるいは出産直後の女性が使用していたものだと結論付けた。『モナ・リザ』に描かれている女性の髪が無造作に下ろされているのではなく、後頭部でボンネットないし髪留めピンのようなものでシニョン(en:Chignon (hairstyle)) にまとめられていることも判明している。16世紀では、無造作に下ろした髪は未婚の少女か娼婦の髪型だとされ

ており、『モナ・リザ』のモデルとされるリザ・デル・ジョコンダが既婚女性なのに、下ろした髪型で描かれているという矛盾点がこの発見により解決された。『モナ・リザ』にはまつげも眉毛もはっきりとは描かれていないように見える。このことについて、当時の上流階級の婦人たちは、まつげや眉毛が見苦しいとして、すべて抜いているのが普通だったとする研究者もいる。2007年にフランス人技術者パスカル・コットが、超高解像度カメラによる調査の結果、もともとの『モナ・リザ』にははっきりとしたまつげと眉毛が描かれていた痕跡が見つかったと発表した。

イタリアのトスカーナの渓谷地帯ヴァルディキアーナ (en:Valdichiana) には、『モナ・リザ』の背景に描かれているのは、当地の風景であるという昔からの伝承がある。2011年に出版された専門誌『カルトグラフィカ (Cartographica)』にも、『モナ・リザ』の背景とヴァルディキアーナの地形が合致する部分があるという記事が掲載された。

### 『真珠の耳飾りの少女』

(しんじゅのみみかざりのしょうじょ、蘭: *Het meisje met de parel*, 英: *Girl with a Pearl Earring*) はオランダの画家 ヨハネス・フェルメール (Johannes Vermeer) (1632~1675) の絵画であり、彼の代表作の一つ。『青いターバンの少女』・『ターバンを巻いた少女』とも呼ばれ、オランダのデン・ハーグのマウリッツハイス美術館が所蔵する。口元にかすかな笑みをたたえるかのようにも見えるところから「オランダのモナ・リザ」と称される事もある。

制作されたのは1665年もしくは 1666年にかけてであろうと推定されている。フェルメールが33歳から34歳の頃で、画家として安定した技量を発揮しつつあった時期である。ただし、本作の構図は極めて単純で、少女の上半身が描かれているだけで他に年代を推定できるような物品や背景が無く、少女の特徴であるターバンも全くの異国の風俗で、オランダ社会のファッションの移ろいとは無縁であるなど、時代から隔絶した趣が強く、1665年又は1666年という数字もあくまで推測の域を出ない。この絵画には「IVMeer」という署名があるが、日付はない。注文を受けて描かれたのか、そうであれば誰から注文を受けたのか、という事も不明である。その後、フェルメールは1675年に43歳で破産同然で死去したので、残された作品も競売にかけられるなどして散逸した。『真珠の耳飾りの少女』も、他の絵とともに1696年に競売された目録が残っている。デ・トンブ (A.A. des Tombe) は、1881年にハーグのオークションにてわずか2ギルダー30セント (およそ1万円) でこの絵を購入した。デ・トンブには相続人がいなかったため、この絵を他の絵画と一緒にマウリッツハイス美術館に寄贈し、以後ここに所蔵されている。1882年以來何度か補修が行なわれ、その結果、絵はフェルメールによって描かれた当時の状況に非常に近いものとなっている。現在取引きされるなら、その価格は100億円とも150億円とも言われる。

描かれた少女が誰かはわからないが、これは「肖像画」ではなく、「トローニー (tronie)」という独自の様式に分類される。モデルなしに想像で描いたものか、実際にモデルはいても、肖像画のようにその人物の地位や名声を表面に押し出す必要がない、そのため画家が自由に描く事ができるものである。

下唇を明るく光らせ上唇の輪郭をぼかす事で若々しく瑞々しい質感が出されている。これらは、唇の濡れた感じを示す効果がある。口元は少し開き加減で、鑑賞者には何かを言いたそうに見え、また微笑しているようにも感じられ、いずれも強い印象を与え、想像力を刺激される。輪郭線は用いず、光の反射だけで直径2cmはありそうな大粒の真珠を写実的に描いている。フェルメールの作品の多くに言える事であるが、この作品の場合は特に色の数が少ない。背景の黒を除けば、黄色と青色が主要部分

を占めている。黄と青は補色の関係にあり、その対比は際立って目立つ。従って少女が頭に巻いているターバンの鮮やかな青が強く印象に残る。この青は西アジア原産のラピスラズリという宝石から作った非常に高価な絵の具を用いたものである。もともとこのターバンが人々の目を引き、『青いターバンの少女』・『ターバンを巻いた少女』と呼ばれて来た。ターバンは、実際には当時のヨーロッパでは一般的なファッションではなく、特異な衣装である。当時はトルコが強大な帝国を築いており、ヨーロッパ人にとってトルコやアジアの文化は異国情緒をそそる憧れの対象でもあった。本作の場合も、異国趣味を意識したものであろうと考えられる。描かれた少女は、体は横を向きながら、肩越しに顔をこちらに向けようとしている。誰かに気付いて振り返った一瞬を捉えたように見える。これも見る者を引き付け、様々な想像力をかき立てるため、本作の強い魅力となっている。

## 『叫び』

(さけび、ノルウェー語: *Skrik*、英語: *The Scream*) は、ノルウェーの画家エドヴァルド・ムンク (1863～1944) が1893年に制作した、彼の代名詞とも言える油彩絵画作品。ムンクは同年と1895年にパステル、1895年にリトグラフ、1910年にテンペラで同じ題名、同じ構図による作品を描いており、全5点の『叫び』が存在する。

幼少期に母親を亡くし、思春期に姉の死を迎えるなど病気や死と直面せざるを得なかった1890年代のムンクが、「愛」と「死」とそれらがもたらす「不安」をテーマとして制作し、「フリーズ・オブ・ライフ (生命のフリーズ)」と称した作品群のうちの一作であり、『叫び』はその中でも最も有名な作品である。また、同題名、同構図の作品群『叫び』の中で世界的に最も著名なのは、最初に描かれた油彩の『叫び』であり、オスロ国立美術館(en)が所蔵している。

極度にデフォルメされた独特のタッチで描かれた人物、血のように赤く染まったフィヨルドの夕景と不気味な形、赤い空に対比した暗い背景、遠近法を強調した秀逸な構図の作品であるが、この絵は、ムンクが感じた幻覚に基づいており、彼は日記にそのときの体験を次のように記している。

「私は2人の友人と歩道を歩いていた。太陽は沈みかけていた。突然、空が血の赤色に変わった。私は立ち止まり、酷い疲れを感じて柵に寄り掛かった。それは炎の舌と血とが青黒いフィヨルドと町並みに被さるようであった。友人は歩き続けたが、私はそこに立ち尽くしたまま不安に震え、戦っていた。そして私は、自然を貫く果てしない叫びを聴いた。」

「叫び」はこの絵で描かれている人物が発しているのではなく、「自然を貫く果てしない叫び」のことである。絵の人物は、「自然を貫く果てしない叫び」に恐れおののいて耳を塞いでいるのである。なお、ムンクがこの絵を発表した際、当時の評論家たちに酷評されたが、のちに一転、高く評価されるようになった。

エーケベルグ(en)の町は、高台からオスロとその先のオスロ・フィヨルド (地名に反してフィヨルドではなく、北欧に特徴的な湾であるヴィーケン(en)) を望む景観が、『叫び』の実在する舞台として知られている。世界に広く知られている上に強烈な印象力とテーマ性を特徴とする本作は、大衆文化の表現媒体 (看板、プラカード、音楽、映画、漫画、テレビ番組など) のなかで、発想のヒントとされたり、構図や人物を真似たパロディなどのかたちで扱われることも多い。